餅の的
（風土記から）

東京女子高等師範学校 敬謙堂教授 石井庄司

秋の収穫が終わると、農民はまず今年の米で餅を見、神に供へ、そして自分等も音鼓を打って、一年の努力を忘れるのである。神棚に供へられた白々と見た餅の姿が、農民は如何に大切にするか。これは皆雅生活者、米の消費者に於てよ、神の理解できない位である。眼がつぶれる程、誠が常る。勿体ない。いって一粒の一粒をも無駄にしない。いふ本能的な有様は、全く美を有するものである。この心持は、誰に、も味はつれてもらうたといえよう。

山本有三氏が子供の友に書かれたものの中にみなさん、米粒を見たことはありません。毎日毎日、けふのご飯はかいの、まづいの、勝手にしていただいて食べましょう。一度手の平にのせてよく見てさら

tては米粒を見たことはありません。百姓から、昨年の障害、今年の有望、略して南に飛び。常年的に、百姓死に絶えて、米田は造らす、運に荒れ廃てたり、時より以降、水田に宜からず。

著者が不明で、水永弘安の頃の作と云はれてる考験的雑筆揃袋に於て、此の話は次のおやに傳へられてる。

昭和八年ハ一八年名古屋市市街ヲ取扱スル画家ニシテアリテ、野田法師堂ノ作家ニセテアリテ、

家著クリ田ツクリテスケリ。アリッキテ家トイヲノ
カカリ。酒ノミアソビクルール、トリアヘブズ日サイケ

ルニ、マトノカカリニサ、講ク、リク的スシテ

ケルホドニ、ソノ俳句キ島トリニ、トビサミニール、ト

ソレヨリ後、次第オトロヘテ、マドヒセニール。ア

ノハムシキ野ニサリアリクール、天平年中ニ遠見郡ニ

ノアサリクール、アニサリキトハク、ソニ苗トナカラレ

トカレバ、オドロキオンレテ、モツクラサ、ステニクリ

トヘル事アリ。俳ハ福ノ源ナレバ、福神サリクル故

二、オトロヘルニコノ。

風土記の原文は解かれたところもあるが、まづ風土

記に据って敷数したものを思はれる。要するに全く同一の

傳訳である。

日本古典全集集、第九、六一三頁（六四四頁）

風土記の原文は解かれたところもあるが、まづ風土

記に据って敷数したものを思はれる。要するに全く同一の

傳訳である。

山避風土記に日、伊奈利の社、いなりこ神へは、

楽中家や時等が関係伊仏真の奉公稲神を積み立て富裕

を有ち。すなはち、餅の形をはしがば、白鳥化成

てて、飛躍りて山の峰に居り、稻なり生じて。遂に社

の名は為し。その苗裔に至り、先の過を悔いて、社

の木を抜にして家に庭を建てて祭りを。今その木を殲

って蘇きば福を得、その木を殲して枯れば福あらじと

いわれも富み栄えでる者、餅を食にして祭を為げに

白鳥こなって飛び去り、後に不幸を招くか二脚のようで

ある、これは餅を神聖なものこそし、米を大切に取扱ふるい

ふ精神のあらはれのようである。これを子供にかかせる

にはそうすればよいか、まう大體の話の筋を立てて見よ。

二

むかしむかし、一の若者がありました。自分で耕して、

自分で作って、暮を立てたと聞きつつ、方々かして歩き

山を越え、野原を越え、すすく向ふに歩きますと、廣

々としたよ土地が見つかります。そこで若者はせつせ

て野原を耕して、田園をこしらえ、そこで稻を作るところに

しました。稻代さいふ田園へ、稻の種をポポロさまきます。稻

水が好きですから、水間は乾して、夜には水を溜めておき

ます。すると穂がそしたかはいい、稻の苗が出來ます。それ

をもう少々広い田園へ植えかえます。これを田植せしめる。

夏の暑い日がカンカンに照りつけるような日でも、若者

は田園に出て、稻の世話をしてやります。稻はくねく大
きくつって、葉を出し、花が咲いて、満天の風が吹く秋の頭にありまえす。稲は寒かかって、すっかり金色になりま
す。それを刈りこって、稲ふるいしり、穂をしめます。お
米は、お米を切ったところがありませんか。小さい小さい
お米ではありませんが、長い間苦労を重ねなければ、手に入れるこ
の出来ない大事なものですね。
さて、この若者は、廣い田園を耕して、お米を澤山取入れ
ることが出来ました。それをきいて、あちらからもこちら
からも、人が集まってきて、みんな心を合わせて、一生懸命
に働きました。若者は初めて、この村を聞きの、村長
さんになりました。そして、お家さんはさん？お金持ちになり
ました。
その中に、この若者の村長さんは、年をこつって来ら、
段々力がなくなりました。そして毎日お酒を飲んで遊んで
ばかりました。
この村長さんは、大もうもを射るところが上手で、誰にでも
負けないかといって自慢をしておきました。
或日のこと、大勢の人々お酒盛をしておりましたが、弓
を射るところにできませんでした。飲めるもので、個々にこ
のことを書きにありました。また、矢はもうよく射るのとおり、
このたんに世話は上手い鳥にかかって、バタバタこぼれた
ぼすこと、ついてうまく飾るのとおり、稲を作ってもお米がこれから
でない。そこでお金持ちだった村
長さんの家のも、ヨーく貯貯さられてしまったので、
検証は簡単であるが、稲作といつことも、困難さないといけ
ないから理解させるため、初めに説明的説明の歴史を加えること
とした。話の筋は、主として先祖崇拝のものにあってこと
いうようにしてみた。しかもあまり原因結果にすると、確
かになるから考案をする。なぜ文脈の中で、百姓が死に絶えるとあ
るか、これでは余り珍重に過ぎるのだろう。今で、米が凍らぶことか
に止めた。それで米がしたるくで困っているとかれえだ
けで、それから先は次第しない方がよかろうと思う。